

けないという声を背に受けたように、迷うことなく、がむしゃらに捨てたのです。こうすることの他に、父を失い、モラトリアムが終つたことを心と身体で確認する術がなかつたかのように。ですから編集者時代は、父に守られ、そして勿論、先生方に守られた、何ものも恐れなかつた、ひたすら目を見開いてハツキリと見ようとしてやまない、まさしく「目時」そのものであつたのです。

私と『幼児の教育』

池戸允子

(十文字学園女子大学)

午前二時、街灯ひとつない真暗な武蔵野の雑木林の中を我が家に向かうタクシーの中で、身をこわばらせていた。『幼児の教育』の校正を終えて凸版印刷から清瀬まで帰る途中の思い出である。私はこの雑誌の一〇〇年という歴史の中のほんの一年数か月、昭和三

十一年（一九五六年）から三十二年にかけて編集にかかわらせて頂いた。

当時王幹は津守真先生であり、お茶の水女子大附属幼稚園で行われた編集会議には、同園長であつた及川ふみ先生も出席されていた。私は大学を卒業し、専攻科で学んでいた頃からお手伝いをさせて頂いた。しかし、この頃のすべての資料や、私が関わった『幼児の教育』や記録、日記などは一九九一年十一月十五日、原因不明の火事により焼失した我が家とともに灰になつた。今私は記憶を辿つて思い出すまさに書いて見ようと思う。

第一は蟻山政道氏の講演である。私はその講演を聞きテープ起こしをした。本音はすべて忘れてしまつたが、今も脳裏に焼き付いているのは「家庭の崩壊」という言葉である。

家族関係を研究していた私はかつて経験のない戸惑いを覚えた。それとともに「家庭」を見る目が変わつた。以来その言葉の意味は、私の中で広がり変貌して現在に至つている。

当時、お茶の水女子大学の学長であられた蟻山氏は、二十世紀から二十一世紀にかけて社会の崩壊が現実になり、様々な社会問題は、家庭の崩壊に起因することを見通しておられたのではないか。

第二は流行、特に社会や教育に関するものである。それは「生涯教育」が来年はクロウズアップされると、編集の仕事をしているとき何気無く聞いた言葉である。

若い世間知らずの私は、教育界も含めて様々な社会の流行は、意図的に作られていることを知りショックを



受けた。

この『幼児の教育』の編集にたずさわった時期こそ、私自身の人生の転換期であり、私は自らの人生の方向を決定すべく、心の中で大格闘をしていた時と重なる。

一九六七年六月九日の夜、私は人生の転機ともいうべき決断を自らに科した。それはキリスト教伝道者として救世軍に身を投じることであつた。なぜ救世軍であつたのか。それは父も母も救世軍士官であり、日本の救世軍の創立者といわれる山室軍平は、母の叔父である。

私は児童学科に学び、子どもと共に歩む人生に限りない魅力を感じ、到底捨て去れないものがあつた。その決定は神がしてくださつた。児童学に関する魅力をそのままにその執着心から開放され、その日「神があなたを選んだ」という聖書の言葉に従つた。キリスト者であられる津守先生は、「献身以外の理由だつたら止めさせなけれど」といわれ私の決断を祝福してくださつた。現在は、小さな単立教会の牧師として、この時代の荒波に翻弄されながら船底に安らかに眠りたもう主に信頼して船旅を楽しんでいる。そしてあの時の決断が間違いでなかつたことに感謝している。

(敷島聖書福音教会牧師)

